

細記録されている。

## 私の戦後一年

東京都 柳田友邦

### ◎引揚証明書

終戦直後新京に進駐したソ連軍は「写真機は武器と見なす」という主旨の布告を出して、敗戦市民（日本人）から写真機を取り上げた。善良でない私はカメラを油紙に包んで石炭箱に隠した。

善良な市民は、手元に残ったフィルム、印画紙、現像薬などを露天（道端）に並べて売り出したが、当然誰も買う人はいない。私は「まてよ、今後国で生産される見こみはないであろう、このさい、将来無駄になっても良いから買って置こう」と思い、捨て値で買った。当時これが役立つとは考えていなかった。

時が移り、引揚げの話がちらほら街のうわさになると、引揚用証明写真が必要になった。この頃になると、

ソ連兵の追求もなく、私のいた第五代用官舎自宅前にガラス室を建て、スタジオとして写真屋を始め、寒さも忘れ仕事をした。ある時、撮影に来た開拓団員らしい一団の中に、着物が破れ、お尻の肉が見えている夫人がいた。呼び止めて着替えの着物を与えたことがある。そんなことで、おそらく千人ぐらいには無料で提供した。ソ連軍が私にその機会を与えてくれたといえなくもない。

出張撮影の途中、避難して来た開拓団員が収用されている小学校の講堂に行つて、がく然とした。一家族ずつが、わずかな荷物を手にして、火の気の全く無い板の間に二、三人ずつ固まっている。ピアフラの子供のように痩せ細つて、うつろな瞳だけが大きく、どこを向いているのか全く無表情で動こうとしない。

この子等の親達は働きに出かけているのである。四、五体の死体が重ねられているのが見え隠れしている。凍っているのだ。講堂の外は零下十何度である。吉野公園の池が一メートルぐらい凍る厳寒である。この子等の親には蓄えが無い。その日々を働いてその代

価で食糧（粟、高粱等）を買い、子供達に食べさせる。働くところとてあまりない。ロバが豆腐屋の石臼をぐる／＼廻って引いている。このロバの仕事を代用してでも金を貰わなければならなかった。日ごとに労賃は安くなる。親も食糧不足でやせる。明日はない。凍土を掘って肉親の屍を埋めてやる余裕さえ無いという極限の状態であることを年寄りが話してくれた。

明日親も子も死ぬかも知れぬ状態で、子供だけでも満人にあずけ、生き長らえてほしいと思うのは当然であり、これしか無かったのである。あずかった満人に全く善意が無かったとはいえないが、男子は将来は農夫に、女子は女郎にでも売り飛ばそうと考えていた者も皆無ではなかったと思う。このことは親も暗黙裡に承知するよりなかった。一袋の粟を受取ってあずけたのである。大部分の残留孤児の境遇をレンズを通して覗き見た。

◎招かれざる客

私の家にはソ連兵が通訳を伴い、数回物取りに来た。金銭・衣類・万年筆等の小物を物色した。ある時、上

衣を脱いだ、よそで奪った腕時計が両腕に五、六個ずつまきつけてあり、更に私のものを加えたのである。この時通訳は（日本人はこんないろいろなものを持っているから負けたのだ、われわれは機関銃と弾を作っていたので勝つたのだ）と言った。この通訳は残念ながら日本人である。「回覧板です」と言って、扉を開かせ、ソ連兵と共に侵入して、ソ連兵と同じように物取りをしているのである。恐れ入ったものである。

又ある日の夕方、病院通いの妻にピストルを突きつけ、子供のおむつの中までさぐったソ連兵もいた。彼等は日本人がお金を隠す場所を熟知しているようで、聞いた話では、唐紙をピリピリ剥がす者もいたようである。

ソ連兵は夜中に、階段の途中に特に設けた扉を数分で壊して突破し、私の家に来た。妻と子供は風呂桶に隠れた。玄關の錠を下したままの鍵をゴボウ剣でコツコツ掘り抜いて、小一時間かけて侵入した。この二人連れはポロポロの服を着ていた。一人がマッチの火を電球に近づける、何回か同じ動作をする。この男達は電球を見たことがなく、ランプに灯をつけようとして

いるらしい、ちよつとスイッチをヒネれば電燈はつくのである。ついにあきらめて、一人がマッチをすり、別の一人が洋服ダンスの中のものを引き出す。マッチが消えると闇になる。このような動作を繰り返して取つていった。

われわれ隣組が相談し、ソ連兵が来たら近隣の者が石油缶や鍋を叩いて大きな音を出すことにした。侵入者は、ゲーペーウなどが聞きつけてくることを恐れ、たいへん効果があつた。

ソ連兵の引き揚げたあとに共産軍の八路兵が入つて来たが悪い事はしなかつた。つくろい物などを要求したが、必ず代価を払つた。額の問題ではない。

その後、物取りは何回が続いたが、幸いにして私の所には来なかつたので、大変助かつた。

ソ連兵が撤退したあと、共産軍が駐屯して、軍政が代つて、物取りや暴動を心配したが、中国人の取締りも厳しかったので、世情も安定したのであつた。雪解け頃に、国、共、両軍の停戦協定の成立で治安も更によくになり、日本人難民の引揚げが始まつた。なんとか

家族共々ぶじに帰国出来た喜びは、同胞の犠牲によつて得られたものとの思いで一杯である。

## 暴民の襲撃

神奈川県 宮沢謙介

時折り、パシッ、ピシッ、と小銃弾がすぐ耳もとの壁にはじける。そのたびに、暗い土間にうつぶせしたみんなの丸い背中が、びくびくつと動く。そのうちの何発かは窓硝子をブスッと破つて、家の中に無気味な音を立てて飛んでくる。ここは満州奉天の社宅、暴民に木材は床板まで持ち去られ、レンガだけになつた家に同僚の家族、女子寮の娘達、私の妻も二歳の娘を抱いて。誰もが窓の下にハイツクばつて、耳を両手でふさいで、じーっとしている。

「頭をあげたら駄目だぞ」注意をする小さな声、相手に聞こえるかと心配するぐらいもう近い、踏みこまれて皆殺しになるか真剣だ。